



武蔵大学学長
平林 和幸

学部教育強化策の一環として、ゼミの充実を図る大学が増えている。ゼミ改革に取り組む武蔵大学の平林和幸学長に寄稿してもらった。

現在、武蔵大学はゼミ改革に取り組んでいる。目的は、社会からの要請

「四年間必修」「全員履修」のシステムで、教員と学生が強い関係性を築ける武蔵大学のゼミの特長を生かし、「知と実践の融合」という理念のもと、プログラム開発ときめ細かい指導を、全学一体で進めている。その成果の表れか、最近は学生の自主性や企画力の向上が感じられるようになってきた。

受け身の姿勢

私たちがゼミ改革に取り組み始めたきっかけは、開学以来「ゼミの武蔵」という定評を得ていたにもかかわらず、活動が停滞していたからだ。原因を分析したところ、学生のコミュニケーション能力の不足で活発な議論が起らないこと

知識生かす力 ゼミで育成

意識の中には、知識量が、試験からしか得られない
 多い学生は知識活用能力が、少人数での活動が可
 も高いという前提があつたが、この前提は今日では成り立たない。

教員と距離近く
 能なゼミは、講義型授業に比べ体験学習を実施し
 導教授制を採用してい
 やすい。また、学生と教
 一年生から始まり、

武蔵大学のゼミは、指

他方で、社会が学生に求めるのは、知識活用能力である。特に企業は採用にあたって、専門知識よりもコミュニケーション能力を重視する。教員は個々の学生の性格や生活環境などが把握でき、一人ひとりに合わせた指導を行える。すべての学生が履修する。したがって、教員と学生との距離が近く、指導がしやすいという特徴を持つ。どの学部も一年

ン能力や行動力を重視する傾向を強めている。

しかし残念なことに、こうした能力を育成するプログラムを、大学側は十分に提供してこなかった。

こうした場合、二、三年生で卒論を書いた学生は、四年生から専門に特化した「社会人基礎力」のゼミ活動は、担当教員のとめる。二年生・三年生が、経済産業省が概念化した「社会人基礎力」の基礎を築き、四年生から専門に特化した「社会人基礎力」のゼミ活動は、担当教員のとめる。二年生・三年生が、経済産業省が概念化した「社会人基礎力」の基礎を築き、四年生から専門に特化した「社会人基礎力」のゼミ活動は、担当教員のとめる。

成果競う／オープン参加／費用補助も

学生の行動に積極性

た。むしろ学生たちは、サークルやアルバイトなどの学外活動によって、この能力を体得してきたのである。採用面接で、大学で勉強したことよりもアルバイトで何をやってたかを問われることが多いのは、その証しだ。

ており、具体的には、前に踏み出す力（アクシヨン）、考え抜く力（シンキング）、チームで働く力（チームワーク）の三つの能力とされていく。まさに我々が模索していた方向性に道筋をつてくれたのである。

が、知識活用能力育成のために一層の工夫を促進する仕組みがゼミ改革だ。その方向性は「知と実践の融合」という教育理念に沿い、「自立」「対話」「実践」の三つの言葉で示した。

経済学部では「ゼミ対

原理を持ち込んだことが、効果を上げた。人文学部では、卒業論文の発表会を始めた。ゼミを公開し、他のゼミの学生も興味がある者は参加できるようにした。ゼミ公開によって教員も学生も緊張感を持ってゼミへ公開によって教員もは、学生の行動に積極性が出てきたことである。

向ければんのインターネッ ト販売戦略や若者向け の自動車のコンセプト作 りなどに取り組み、企業 担当者に研究結果をアレ センテーションした。何 よりもうれしいのは、学生の行動に積極性 を絞っている。ただ残念 なことに、こうした動き

社会で活躍する人材を増やすには、大学で知識活用能力をばぐむプログラム充実が必要だ。私たちは、その育成に最

育

抗研究発表大会」の拡充を進めた。これは、ゼミでの研究成果を代表者が発表して競わせるイベントである。三年前から、

ミに取り組むようになった。さらに、ゼミ活動改善のための反省会議を教員と学生で実施している。企業が顧客のクレームを学部横断的なチームで

も適しているのが、ゼミだと考えている。なぜならば、知識活用能力は体

教

審査員として教員だけでなく卒業生を中心に学外のビジネススマンを招き、

ムから新製品を開発する 解決しようとする「武蔵
のと同じ発想である。 アイデアコンペティショ 地道な教育改革をどう
資金面の補助も必要で ンX」を学生が企画し実 やって社会に伝えていく
か、大きな課題だと思っ

教育

教員と距離近く

わが国の教育行政は、教育の成果を観察してそこから必要な施策を引き出すための仕組みを長く欠いてきた。現場や地方の自律性を高める方向への義務教育の構造転換は、同時に水準監視装置を必要とする。それゆえ

全国一斉学力

うまく使えば、学力格
小するためにどこに人と
投下すればよいのが浮
がる。それができて初め
十億円の国費を投入した
事業の採算がとれる。
(お茶の水女子大学教授

耳塚 寛明)

企業にプレゼン

ミ活動を行う場合には、十八歳人口の減少で活動費用を与える仕組みも備えている。大学の競争は激しくなる一方だ。

ゼミ改革は、着実に成果を上げていると感じている。まず、産学共同プロジェクトが増えた。企業などが入試方法の導入

業から現実には直面している課題をもらい、解決策を考え提案しているゼミが多い。前年度は、婦人

だが大学間競争の本道は、教育の中身の競い合いだ。私たちは、講義型授業での専門知識の蓄積

向けかばんのインターネ
ット販売戦略や若者向け
の自動車のコンセプト作
りなどに取り組み、企業
担う人材を輩出し続ける

は、学生の行動に積極性を絞っている。ただ残念なことに、このように動

が経営する企業の課題
力に頼った学校選択が偏
一昨年、学生による大学
広報誌「武蔵ナビ」が創
刊された。昨年は、卒業
は受験生や社会になかな
か認知されにくい。相変
わらず偏差値やブランド

を学部横断的なチームで
をきかせている。

解決しようとする「武蔵
アイデアコンペティショ
ンX」を学生が企画し実
地道な教育改革をどう
やって社会に伝えていく
か、大きな課題だと思っ